

幕末明治の写真師列伝 第二百二十九回 宮下欽 その四十七

(註：前回の続き)

クワン

一、丸キ銃 五十

メッキ

一、再用鍍金 一壇

一、洗へ矢 一本

アルコール

一、□□□□□ 一升

一、龍ノ口 一ツ

一、榕羅細穂 二升

カムリモノ

一、冠リ布 但黒 一枚

羅紗

一、流(註：硫)酸鉄 一升

一、雞(註：鶏)卵紙 拾五枚

一、没食酸 小一壇

(カリ)

一、青酸加里 一升

一、硫酸曹達 一升

フルニス

一、保護止液 但濃ク 一壇

溶解液

右之通、宮下氏へ貸シ遺シ薬品機械等之控書、

以上のようなものを宮下欽は通天楼から借りている。

「八月三十一日 天気 八十一度

一、午前第十時頃、当建家一件書入證文一通、深尾吉真殿方へ宮下證書認メ(註：したため)入置、金五十円借用之日限ニ付、世話人吉岡氏へ右之日延へ願ニ武助出行候処、御同人留主ニ付御家内へ言置候由、午後第一時武助帰ル、(後略)」

明治6年(1873)の『通天楼日記』の記述は8月31日までで、それ以降の記述がない。

翌明治7年(1874)になると、明治6年(1873)8月4日に信州松代に到着したはずの宮下の名が、明治7年(1874)3月14日に突然出て来る。この間、宮下が何をしていたのは判らない。信州松代で独立、すぐに写真館の開業を志すも、「三、四十日位ハ随分繁昌可致様子ニ御座候、其模様ニ寄り少々ニ、三十日位ハ居延ニ可相成モ難計御座候間、」ということから、上記の薬品機械等の荷物が届くまではそれもできず、また信州松代では営業写真館の経営が難しかったのかもしれない。

「三月十四日 晴

今日ヨリ箕浦来、
宮下氏・留吉(註2)、武(註：舞)楽写真罷越、(註1)

「三月十五日

宮下氏・留吉、武楽写真罷越、(後略)」

「三月十六日 雨

(前略)〇明朝昨朝宮下氏方先生江以郵便書状差出ス、(後略)」

「三月十七日 曇午後雨雪

(前略)

一、正銀之三拾六匁五分、宮下氏所持之品催促、硝酸銀五拾四匁七分五厘出来、(後略)」

「三月十八日 晴

(前略)〇午前九字宮下氏・加納氏・留吉并亀井竹次郎殿江参、四人同道聖堂(註：湯島)江写真罷越、(中略)〇御徒士町(おかちまち)渡辺様方兼而(かねて)借用致置候矢野氏之写真、返却致し呉候様申参候付別便江相存、午後四字頃横浜方郵便ヲ以書状至来、宮下氏江相渡、尤コロイジヨン(コロジオン)之義先生方御差函之事、同刻過加納氏・竹次郎殿・留吉帰宅、宮下氏ニテ牛込辺江相廻り候由、(後略)」

「三月十九日 晴

(前略)〇午前九字宮下氏・竹次郎殿・留吉聖堂(註：湯島)ニ罷出、写真罷越、(中略)〇宮下氏中田方コロイジヨン(コロジオン)一ホンド取寄聖堂江持参、代金三両一分二朱之由、トヤマスコロイジヨン明キ(註：空き)瓶一ツ損し候由、宮下氏□□被申聞、(後略)」

「三月十七日 曇夕刻雨

一、(前略)〇午前十字宮下氏・留吉聖堂(註：湯島)江写真罷越、同刻過竹次郎殿来、同刻聖堂江御出、(後略)」

「三月廿一日 曇

一、聖堂(註：湯島)写真休日ニ付休、〇宮下氏朋友来、楼上ニ而対話、即刻帰、(後略)」

「三月廿二日 朝雪雨午後曇

今日雨天ニ付聖堂写真休、〇今日茂諸機械并薬品等取調致ス、〇種田織之助殿来、松蔵殿面会、即刻帰、午後酒井妙成殿被参、宮下氏面会、木村正男殿被参、加納氏面会、即刻帰、鹿野氏同行、木津氏方使来、留吉ヲ借請度旨申来、則(註：即カ)使同道留吉木津氏江罷越一泊、吉五郎泊、

註1：「舞楽写真とは、朝鮮半島や中国大陆などから伝わった楽舞を源流にし、平安時代に大成した器楽と舞のこと。この時の舞楽は、『通天楼日記』の記述から、湯島聖堂で行われた舞楽の写真撮影のことである。

註2：留吉とは横山松三郎の弟子で、後の横浜の元町4-17で独立、開業した写真師。日比野重郎編『横浜商工名鑑』(横浜通信社、大正12年)にその名がみれる。

(※「方」は平仮名の「よ」と「り」の合字)

(森重和雄)